

SNS 橋渡し型社会関係資本の社会比較研究—社会生態学的検討—

THOMSON Robert (北海道大学、日本学術振興会) ・ MANAGO Adriana (Western Washington University) ・ MELTON Chelsea (Western Washington University)

キーワード：橋渡し型社会関係資本、インターネット、関係流動性、社会生態学、文化

研究背景 Facebook や Twitter のようなソーシャルネットワークサイト（オフライン上の対人関係維持を主な利用目的とするインターネット交流サイト、以下：SNS）は、橋渡し型社会関係資本（Bridging social capital, 以下：BrSC）の形成を促すと指摘されてきた（e.g. Ellison, Steinfield, & Lampe, 2007）。すなわち、SNS は、すべての社会的つながりを統括することで、身近で同質性の高い強い紐帯だけでなく、弱い紐帯を介した新たな社会的・情報的資源へのアクセスを可能にする。しかし、SNS ネットワークのサイズやその同質性は社会によって異なることから（e.g., サイズ：日本<米国、同質性：日本>米国；石井, 2012）、こうした SNS ネットワークの性質の社会差は、そこから得られる BrSC の程度に影響するだろう。

本研究では、SNS ネットワークサイズとそれがもたらす BrSC の社会差の原因を、人間行動を社会環境への適応として捉える社会生態学的アプローチから検討し、社会生態学的要因「関係流動性」の影響に着眼する。対人関係の選択肢が豊富で人々の任意による対人関係の形成が容易な関係流動性の高い社会（Yuki & Schug, 2012）では、個人は新たな対人ネットワークを形成する機会を持ち、また容易に関係を形成することができる。このため、人々は数多くの対人ネットワークを持つがゆえに（Adams & Plaut, 2003）、SNS 上のネットワークも大きく、個人がアクセスしうる BrSC も増えるだろう。一方対人関係が比較的固定的で、対人ネットワークを拡大させる機会が比較的少ない低関係流動性社会においては、SNS 上のネットワークが比較的小さく、SNS から得られる BrSC も少ないだろう。

上記の予測を検証するため、関係流動性が高い米国と関係流動性の低い日本を比較し、①日本よりも米国において、人々が保有する BrSC の量が多く、②こうした日米差は、両社会の関係流動性の違いに基づく SNS ネットワークサイズの違いで説明できる、との仮説を立てた。

方法 仮説を検証するために、米国（ $N=164$, $M_{年齢}=20.22$, $SD_{年齢}=1.76$, 女性 37%）と日本（ $N=150$, $M_{年齢}=19.13$, $SD_{年齢}=0.64$, 女性 77%）において、Facebook 及び Twitter 利用者を対象にウェブ調査を行った。BrSC（9 項目、5 件法；Williams, 2006）、関係流動性（12 項目、6 件法；Yuki et al., 2007）、SNS ネットワークサイズ（友人数、フォロワー数）

を測定した。

結果と考察 主に利用する SNS（米国の 90%が Facebook, 日本の 90%が Twitter, $\chi^2=202.08$, $p<.001$ ）、SNS 利用歴（米国： $M_{年}=6.54$, $SD_{年}=1.56$ 、日本： $M_{年}=2.53$, $SD_{年}=1.80$, $t(312)=21.11$, $p<.001$, $d=2.38$ ）、SNS 利用目的（米国の 96%、日本の 83%は主にオフライン既存関係維持, $\chi^2=14.76$, $p<.001$ ）に有意な社会差があったため、以下の分析においてこれらを統制変数とした。

第一に、BrSC の保有量が日米で異なるか、分散分析を行ったところ、予測通り SNS の BrSC の量は、日本（ $M=2.81$, $SD=.77$ ）よりも米国（ $M=3.25$, $SD=.52$ ）で高く（ $F=13.60$, $p<.001$, $\eta^2=.04$ ）、仮説①が支持された。第二に、関係流動性と SNS ネットワークサイズを介して国が BrSC に与える間接効果（図 1）をブートストラップ法（5,000 サンプル）

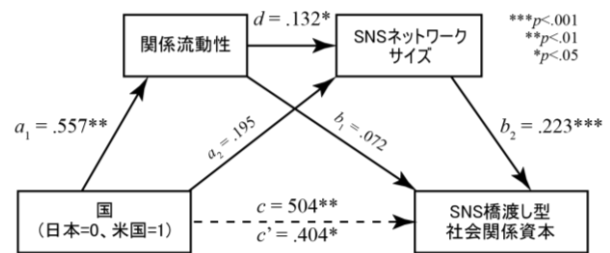


図1 関係流動性とSNSネットワークサイズを介した、国のSNS橋渡し型社会関係資本への媒介モデル

により分析した結果、国の間接効果が有意で（ $a_1db_2=.016$, 95%CI= [.003, .046]）、仮説②が支持された。ただし、日本参加者の BrSC の量を SNS 利用目的別で比較したところ、「既存関係維持」（ $N=125$, $M=2.72$, $SD=.71$ ）よりも「新規関係形成」（ $N=25$, $M=3.27$, $SD=.88$ ）の利用者の BrSC が有意に多かった（ $t(148)=3.40$, $p<.01$, $d=.69$ ）。以上の結果は、SNS から得られる BrSC は、利用者を取り巻くオフラインの社会生態学的環境による影響を受けることを示唆する。ただし、SNS の利用目的により、オフラインの社会的現実を乗り越えて SNS の BrSC のベネフィットを得られることも示唆し、今後さらに検討が必要である。

参考文献 Adams, G., & Plaut, V. C. (2003). The cultural grounding of personal relationships. *Per. Relationships, 10*(3). Ellison, N. B., Steinfield, C., & Lampe, C. (2007). The Benefits of Facebook “Friends.” *JCMC, 12*(4). Williams, D. (2006). On and Off the Net. *JCMC, 11*(2). Yuki, M., & Schug, J. (2012). Relational mobility. In O. Gillath, G. Adams, & A. D. Kunkel (Eds.), *Relationship science* 石井健一. (2012). マイクロブログ Twitter における日本人利用者の特徴